

## 野菜類－茎野菜類－ふき類－ふき－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名		
						灰色かび病	白絹病	葉枯病
1	セイビアーフロアブル20		普	フルジオキシニル	12	○	-	-
2	ダコニール1000		普	TPN	M5	○	-	-
3	バリダシン液剤5		普	バリダマイシン	U18	-	○	-
4	ベンレート水和剤		普	ベノミル	1	-	-	○
5	リゾレックス水和剤		普	トルクロホスメチル	14	-	○	-
6	リゾレックス粉剤		普	トルクロホスメチル	14	-	○	-

## 野菜類－茎野菜類－ふき類－ふき－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名								
						ハスモンヨトウ	アブラムシ類	コナジラミ類	フキアブラムシ	フキノメイガ	ヨトウムシ	アザミウマ類	モモアカアブラムシ	ハダニ類
1	アタブロン乳剤	抑制	普	クロルフルアズロン	15	○	-	-	-	-	-	-	-	-
2	アドマイヤーフロアブル		劇	イミダクロプリド	4A	-	○	○	-	-	-	-	-	-
3	アルバリン粒剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	○	-	-	-	-	-	-	-
4	アルバリン顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	-	○	-	-	-	-	-	-
5	コテツフロアブル		劇	クロルフェナピル	13	○	-	-	-	-	-	-	-	○
6	スタークル粒剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	○	-	-	-	-	-	-	-
7	スタークル顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	-	○	-	-	-	-	-	-
8	ダイアジノン粒剤5		普	ダイアジノン	1B	-	-	-	○	-	-	-	-	-
9	トレボン乳剤	抑制	普	エトフェプロックス	3A	-	-	○	-	○	○	-	-	-
10	パダンSG水溶剤	抑制	劇	カルタップ	14	-	○	-	-	○	-	○	-	-
11	プレバソンフロアブル5	抑制	普	クロラントラニプリロール	28	○	-	-	-	-	-	-	-	-
12	モスピラン粒剤	抑制	普	アセタミプリド	4A	-	-	○	-	-	-	-	○	-

## 野菜類－ふき(ふきのとう)－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県 指定	製剤 毒性	有効成分の種類	作用機構 分類	病虫害雑草名					
						ア ブ ラ ム シ 類	コ ナ ジ ラ ミ 類	ハ ス モ ン ヨ ト ウ	ハ ダ ニ 類	ア ザ ミ ウ マ 類	フ キ ノ メ イ ガ
1	アドマイヤーフロアブル		劇	イミダクロプリド	4A	○	○	-	-	-	-
2	コテツフロアブル		劇	クロルフェナピル	13	-	-	○	○	-	-
3	パダンSG水溶剤	抑制	劇	カルタップ	14	○	-	-	-	○	○

## 13-(46・47) ふき・ふきのとう（野菜類に登録のある農薬も使用可能）

※「ふき」と「ふきのとう」は、農薬登録上「別の作物」であるため注意する。

病害虫名	防除方法	参考事項
葉枯病 さび病	植付前 低湿地での栽培を避ける。 生育期 被害葉を集めて処分する。	・葉枯病は、春（4～5月）と秋（9～10月）に発病が多い。
半身萎凋病	植付前 1. パーティシウム病対策の項参照 2. 土壌消毒を行う。（土壌くん蒸剤の項参照）	・種茎によって病原菌が持ち込まれることが多いので、健全な親株から採取されたものを種茎として用いる。
白絹病	植付前 発病地では連作を避ける。 生育期 発病株は早期に抜き取り処分する。	・多犯性の土壌伝染性病害である。 ・5月下旬頃から発病し、8～9月に被害が目立ってくる。
モザイク病	生育期 1. 発病株は早期に抜き取り処分する。 2. アブラムシ類の防除を徹底する。 （野菜・花きのウイルス病防除対策の項参照）	・モザイク病罹病株を種茎にしない。健全な親株から採取されたものを種茎として用いる。
フキノメイガ	生育期 折れ曲がった葉柄や葉がしおれた葉柄は、虫糞の出ている食入孔の下部から切り取って幼虫を処分する。	・幼虫が茎内深くへ食入すると防除は難しくなるので、幼虫ふ化期～食入開始期（6～8月）の防除を徹底する。
ハスモンヨトウ	生育期 ほ場周辺を除草する。 （ハスモンヨトウの防除対策の項参照）	・若齢幼虫時での防除を徹底する。

## 農薬を使用する上での注意

※ 「ふき」と「ふきのとう」は収穫する部分が異なるため、農薬の使用上「別の作物」として扱われる。  
このため、表1のとおり使用できる農薬が区分されるので注意する。

表1 ふき・ふきのとうに使用できる農薬の区別

ふき <sup>1)</sup>	ふきのとう <sup>2)</sup>	使用できる農薬
収穫する	収穫する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふき」と「ふき（ふきのとう）」の両方に登録がある農薬</li> <li>・「ふき類」と「ふき（ふきのとう）」の両方に登録がある農薬</li> <li>・「茎野菜類」と「ふき（ふきのとう）」の両方に登録がある農薬</li> <li>・「野菜類」に登録がある農薬</li> </ul>
収穫しない	収穫する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふき（ふきのとう）」に登録がある農薬</li> <li>・「野菜類」に登録がある農薬</li> </ul>
収穫する	収穫しない	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ふき」に登録がある農薬</li> <li>・「ふき類」に登録がある農薬</li> <li>・「茎野菜類」に登録がある農薬</li> <li>・「野菜類」に登録がある農薬</li> </ul>

1) 「ふき」とは「葉柄を収穫するもの」で、ラベル上の表記は「ふき」

2) 「ふきのとう」とは、「ふきのとうを収穫するもの」で、ラベル上の表記は「ふき（ふきのとう）」

## 野菜類－茎野菜類－アスパラガス－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県 指定	製剤 毒性	有効成分の種類	作用機構 分類	病害虫雑草名					
						茎 枯病	斑 点病	褐 斑病	立 枯病	株 腐病	苗 立枯病
1	ICボルドー66D		普	銅	M1	○	○	-	-	-	-
2	Zボルドー		普	銅	M1	○	○	-	-	-	-
3	アフエットフロアブル		普	ペンチオピラド	7	○	○	○	-	-	-
4	アミスター20フロアブル		普	アゾキシストロビン	11	○	○	○	-	-	-
5	キノドーフロアブル		普	有機銅	M1	○	-	-	-	-	-
6	クプロシールド		普	銅	M1	○	○	-	-	-	-
7	コサイド3000		普	銅	M1	○	○	○	-	-	-
8	シグナムWDG		普	1.ピラクロストロビン 2.ボスカリド	11、7	○	○	○	-	-	-
9	ストロビーフロアブル		普	クレソキシムメチル	11	-	○	-	-	-	-
10	ダコニール1000		普	TPN	M5	○	○	○	-	-	-
11	トップジンM水和剤		普	チオファネートメチル	1	○	-	-	○	-	-
12	トリフミン水和剤		普	トリフルミゾール	3	-	-	-	○	-	-
13	ファンタジスタ顆粒水和剤		普	ピリベンカルブ	11	○	○	○	-	-	-
14	ベルコート水和剤		普	イミノクタジン	M7	○	○	○	-	-	-
15	ベンレート水和剤		普	ベノミル	1	○	-	-	-	○	-
16	ラリー水和剤		普	ミクロブタニル	3	○	○	○	-	-	-
17	リブレックス水和剤		普	トルクロホスメチル	14	○	-	-	-	-	○
18	ロブラール水和剤		普	イプロジオン	2	○	○	○	-	-	-

## 野菜類－茎野菜類－アスパラガス(露地栽培)－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県 指定	製剤 毒性	有効成分の種類	作用機構 分類	病害虫雑草名		
						茎 枯病	斑 点病	褐 斑病
1	ジマンダイセン水和剤		普	マンゼブ	M3	○	○	○
2	ペンコゼブ水和剤		普	マンゼブ	M3	○	○	○

## 野菜類－茎野菜類－アスパラガス－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名										
						アブラムシ類	オオタバコガ	カメムシ類	ジュウシホシクビナガハムシ	ヨトウムシ	アザミウマ類	ハスモンヨトウ	ネギアザミウマ	ネキリムシ類	ハダニ類	コナジラミ類
1	アーデント水和剤	抑制	普	アクリナトリン	3A	○	○	○	-	-	-	-	-	-	○	-
2	アディオン乳剤	抑制	普	ペルメリン	3A	○	-	○	○	○	-	-	-	-	-	-
3	アドマイヤーフロアブル		劇	イミダクロプリド	4A	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-
4	アフーム乳剤	抑制	普	エマメクチン安息香酸塩	6	-	○	-	-	○	-	○	-	-	○	-
5	アルバリン顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	○
6	ウララDF		普	フロニカミド	29	○	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-
7	エルサン乳剤		劇	PAP	1B	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-
8	ガードベイトA	抑制	普	ペルメリン	3A	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-
9	カスケード乳剤	抑制	普	フルフェノクスロン	15	-	○	-	-	-	○	○	-	-	-	-
10	コテツフロアブル		劇	クロルフェナピル	13	-	○	-	○	○	-	○	-	-	○	-
11	スタークル顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	○
12	スピノエース顆粒水和剤	抑制	普	スピノサド	5	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-
13	ダントツ水溶剤	抑制	普	クロチアニジン	4A	○	-	○	○	-	-	-	○	-	-	-
14	ディアナSC		普	スピネトラム	5	-	○	-	○	-	○	○	-	-	-	○
15	ハチハチフロアブル	抑制	劇	トルフェンピラド	I:21A F:39	○	-	-	○	-	-	-	○	-	-	○
16	ファインセーブフロアブル	抑制	劇	フロメトキン	34	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-
17	フェニックス顆粒水和剤	抑制	普	フルベンジアミド	28	-	○	-	-	○	-	○	-	-	-	-
18	プレオフロアブル		普	ピリダリル	un	-	○	-	-	○	-	○	○	-	-	-
19	プレバソンフロアブル5	抑制	普	クロラントラニリプロール	28	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
20	モスピラン顆粒水溶剤	抑制	劇	アセタミプリド	4A	○	-	○	○	-	○	-	-	-	-	○

13-(48) アスパラガス（野菜類、茎野菜類に登録のある農薬も使用可能）

病害虫名	防除方法	参考事項
茎枯病	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>窒素肥料の過剰施用と栽培後期の肥切れを避ける。</li> <li>疎植にして風通しをよくする。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>排水を良好にする。</li> <li>ポリマルチや敷ワラを行い、土のはね返りを防ぐ。</li> <li>発病茎は早めに刈り取り、ほ場外に搬出して処分する。</li> <li>刈り取り期には茎葉をできるだけ低く刈り取り処分する。</li> <li>苗からの菌の持ち込みが懸念されるため、育苗期にも防除を行う。</li> <li>定植時期によるが5月頃から防除を開始し、梅雨期と秋雨期は短い間隔で定期的に防除を行う。</li> <li>茎を刈り取った後、罹病残茎をバーナーで焼却する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>1年株養成法と夏まき短期（1年半）株養成法は、2年株養成法より被害が少ない。</li> <li>梅雨、秋雨期に多発する。</li> <li>薬剤が株元にも到達するように散布する。</li> <li>銅水和剤を夏季の高温時に散布すると薬害が発生することがある。</li> <li>伏せ込み栽培では、農薬の使用時期が収穫終了後となっている薬剤は使用できない。</li> <li>7日間隔の薬剤散布では、十分な防除効果が得られないことがあるので注意する。</li> </ul>
斑点病	<p>耕種の防除法は茎枯病に準じる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>夏の終わりから秋に雨が多いと多発する。</li> <li>伏せ込み栽培では、農薬の使用時期が「収穫終了後」となっている薬剤は使用できない。</li> </ul>
褐斑病	<p>耕種の防除法は茎枯病に準じる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ハウスと露地の両方で発生する。</li> <li>多湿は発生を助長する。</li> <li>菌の生育適温は28℃で、斑点病より高温で発生しやすい。5℃以下では生育しない。</li> </ul>
立枯病	<p>播種前、植付前</p> <p>土壌消毒を行う。（土壌くん蒸剤の項参照）</p> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>排水を良好にする。</li> <li>苗からの病原菌の持ち込みに注意する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>立枯病に感染した根株を伏せ込み栽培すると、曲り症の発生がみられる。</li> </ul>
ジュウシホシクビナガハムシ	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>残茎を取り除く。</li> <li>被害茎は刈り取り処分する。</li> <li>枯れ茎はほ場外に搬出して処分する。</li> <li>早期発見に努め、適用薬剤により防除する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春先、山沿いのほ場に発生が多い。</li> <li>防除時に残茎に害虫が隠れるなど、薬剤がかかりにくくなる。</li> <li>本虫の加害を受けて曲がったり変色した鱗片や葉芽の内側に本虫の卵がある。</li> <li>刈り株内や枯れ茎内で越冬することがある。</li> </ul>
ネギアザミウマ	<p>萌芽前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ハウス栽培では、UVカットフィルムを展張する。</li> <li>周辺の除草を行う。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>薬剤を定期的にローテーション散布する。</li> <li>多発すると防除が困難になるので、初期防除を徹底する。</li> <li>乾燥条件で増殖が早まるので、適切に灌水管理を行う。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>食害を受けると茎が曲がり、商品価値を落とす。</li> <li>25℃で卵から成虫まで12日、一匹の産卵数は100~200個で増殖力が高い。</li> <li>周辺雑草や近隣作物から飛来侵入し、親茎上で産卵し幼虫が発育した後、地表へ落ちて蛹化、羽化して植物体へ戻る。</li> </ul>
ツマグロアオカスカメ	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>残茎を取り除く。</li> <li>被害茎は刈り取り処分する。</li> <li>枯れ茎はほ場外に搬出して処分する。</li> <li>早期発見に努め、適用薬剤により防除する。</li> <li>ほ場周辺の除草を行う。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>成虫は6月上旬頃から飛来し、8月以降に増殖した成虫が茎に産卵して卵で越冬する。</li> <li>若茎の穂先近辺の茎に口針を差し込み吸汁する。吸汁の傷は伸長に伴い拡大し、若茎の曲がりや被害が酷い場合は先端部が枯死する。</li> <li>動きが俊敏で人が近づくと物陰に隠れるため見つけにくい。</li> </ul>

## 野菜類－茎野菜類－うど－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名		
						黒斑病	白絹病	菌核病
1	ダコニール1000		普	TPN	M5	○	-	-
2	ドイツボルドーA		普	銅	M1	○	-	-
3	リゾレックス水和剤		普	トルクロホスメチル	14	-	○	-
4	ロブラール水和剤		普	イプロジオン	2	○	-	○

## 野菜類－茎野菜類－うど－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名					
						アブラムシ類	センノカミキリ	シクラメンホコリダニ	ウドノメイガ	ヒメシロコブゾウムシ	ヨトウムシ
1	アドマイヤーフロアブル		劇	イミダクロプリド	4A	○	-	-	-	-	-
2	カルホス粉剤		普	イソキサチオン	1B	-	○	-	-	-	-
3	コテツフロアブル		劇	クロルフェナピル	13	-	-	○	-	-	-
4	スミチオン乳剤		普	MEP	1B	○	○	-	○	○	○
5	トレボン乳剤	抑制	普	エトフェプロックス	3A	○	-	-	-	-	-

## 13-(49) うど（野菜類、茎野菜類に登録のある農薬も使用可能）

病害虫名	防除方法	参考事項
萎凋病	植付前 1. 連作を避ける。 2. 罹病残さをほ場に残さないよう処分する。 3. 土壌消毒を行う。マルチ畦内消毒の効果が高い。 （土壌くん蒸剤の項参照） 生育期 発病株は早期に抜き取り処分する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本病の病原菌については、パーティシリウム病対策の項参照。</li> <li>・発病株の枯れた葉柄や茎に無数の微小菌核を作り、翌年以降の伝染源となる。</li> <li>・本病は根株養成中に発病する。</li> <li>・本病への抵抗性には品種間差がみられ、「伊勢白」は強く、「改良伊勢」、「群豊白」、「利根白」は中程度の強さであり、紫系品種の「在来紫」や「愛知紫」は弱い。</li> </ul>
菌核病	緑化栽培、軟化栽培 伏せ込み用の根株は無病のものを厳選する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・湿度が高く、20℃前後で被害が多い。</li> <li>・共通病害として菌核病が発病するレタス、キャベツの後作での根株養成は注意する。</li> </ul>
萎縮病	植付前 健全な種株を選別して植え付ける。 生育期 発病株は早期に抜き取り処分する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本病はキマダラヒロヨコバイにより媒介される。</li> </ul>
センノカミキリ	生育期 成虫を見つけしだい捕殺する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ほ場衛生につとめる。</li> <li>・6～8月に発生する。</li> </ul>

## 野菜類－たらのみ－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名
						そうか病
1	ストロビーフロアブル		普	クレソキシムメチル	11	○
2	トップジンM水和剤		普	チオファネートメチル	1	○

## 野菜類－たらのみ－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名				
						ハダニ類	センノカミキリ幼虫	ヒメシロコブゾウムシ	ネキリムシ類	センノカミキリ
1	コテツフロアブル		劇	クロルフェナピル	13	○	-	-	-	-
2	スミチオン乳剤		普	MEP	1B	-	○	○	-	-
3	ダイアジノン粒剤5		普	ダイアジノン	1B	-	-	-	○	-
4	バイオリサ・カミキリ		-	ボーベリア ブロンニアティ	「-」	-	-	-	-	○

13-(50)たらのき (野菜類に登録のある農薬も使用可能)

病害虫名	防除方法	参考事項
立枯疫病	<p><b>植付前</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>根株が老化すると発生しやすいため、2年木までで掘り上げる。</li> <li>連作を避け、イネ科作物等との2年輪作をする。</li> <li>ほ場は水田を避け、排水の良好な畑地を選ぶ。</li> <li>種根は1年木の無病のほ場から採取する。</li> </ol> <p><b>生育中</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>トラクターや管理機による断根は発病を助長するため、2年木の土壌管理は行わない。</li> <li>窒素肥料の多用は発病を助長するため、分量で15kg/10a以下とする。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本病の伝染源は土壌および種根である。</li> </ul>
そうか病	<p><b>休眠期</b></p> <p>罹病枝、病葉をほ場から持ち出し、処分する。</p> <p><b>植付前</b></p> <p>ほ場内の通気を考慮して、適正な栽植密度とする。</p> <p><b>生育期</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>生育中に株整理を2回以上行い、病葉は見つけ次第ほ場から持ち出し処分する。</li> <li>次の薬剤で防除する。 ストロビーフロアブル トップジンM水和剤</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>適正な栽植密度と株整理の目安は、10アールあたり1年木の場合800~1000本立ち、2年木の場合は600~800本立ちである。</li> <li>抵抗性品種（ぐんま春王、ぐんま春王NT）を栽培する。</li> <li>耐性菌の出現を抑制するため、薬剤の連用は避ける。</li> </ul>
軟腐病	<p><b>生育中</b></p> <p>つる性雑草の除草に努め、風通しを良くする。</p> <p><b>促成栽培（ふかし）期</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>駒木の切り口が変色しているものは、使用しない。</li> <li>温度管理は出来るだけ低温とする（25℃まで）。</li> <li>資材消毒を行う（資材消毒の項参照）</li> </ol>	
半身萎凋病	<p><b>休眠期</b></p> <p>罹病残渣をほ場から持ち出し処分する。</p> <p><b>植付前</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>2年木までで改植し、連作しない。</li> <li>ウド、ナスなどの栽培跡地への植付けは避ける。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本病の病原菌については、パーティシリウム病対策の項参照。</li> </ul>
白紋羽病	<p><b>植付前～生育中</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>根株が老化すると発生しやすいため、2年木までで掘り上げる。</li> <li>未熟有機物の施用を避ける。</li> <li>樹勢を強健に保つ。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>桑園跡地は発病が多い。</li> </ul>
センノカミキリ	<p><b>休眠期（幼虫）</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>穂木は地際部から切り取る。</li> <li>2年木までで掘り上げ、根株を残さない。</li> <li>2年木以降ではスミチオン乳剤を新梢発生前の3~5月に樹幹散布する。</li> </ol> <p><b>生育期（6月下旬~7月上旬；成虫）</b></p> <ol style="list-style-type: none"> <li>成虫を見つけたい捕殺する。</li> <li>バイオリサ・カミキリ※を葉柄基部または茎に巻きつけ、剤の両端をホッチキスでとめる。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>スミチオン乳剤の使用は株養成中のみとし、樹幹散布した株から当年発生した新芽は食用としない。</li> <li>1年木（種根植付1年目）では、使用時期（3~5月）に処理対象である樹幹が形成されていないため、使用しない。</li> <li>センノカミキリの成虫は6月~7月に羽化脱出するため、これに先立ってバイオリサ・カミキリを設置し、この製剤を成虫に接触感染させる。</li> </ul>
ヒメシロコブゾウムシ	<p><b>休眠期</b></p> <p>上記センノカミキリの項参照</p> <p><b>生育期</b></p> <p>成虫を見つけたい捕殺する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>成虫が地上部を、幼虫が根部分を食害する。成虫による葉の食害は生育に影響する事は少ない。</li> <li>卵は根株近くの土中に産み付けられ、幼虫による根株の食害により黄変萎凋し、枯死することもある。</li> </ul>

※バイオリサ・カミキリの販売名称：「バイオリサ カミキリスリム」

## 野菜類—鱗茎類—鱗茎類(葉物)—ねぎ—殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機分類	病害虫雑草名										
						黒腐菌核病	白絹病	さび病	黒斑病	小菌核腐敗病	葉枯病	べと病	軟腐病	苗立枯病(リゾクトニア菌)	萎凋病	ネギアザミウム
1	アフエットフロアブル		普	ペンチオピラド	7	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	-
2	アミスター20フロアブル		普	アゾキシストロビン	11	-	-	○	○	-	○	○	-	-	-	-
3	アリエッティ水和剤		普	ホセチル	P7	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	
4	オキシラン水和剤		普	1. キャブタン 2. 有機銅	M4、M1	-	-	-	○	-	○	-	-	-	-	
5	オリゼメート粒剤		普	プロベナゾール	P2	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	
6	オンリーワンフロアブル		普	テブコナゾール	3	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	
7	カスミンボルドー		普	1.カスガマイシン 2.銅	24、M1	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	
8	カッパーシン水和剤		普	1.カスガマイシン 2.銅	24、M1	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	
9	サブロール乳剤		普	トリホリン	3	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	
10	ジオゼット水和剤		普	ポリオキシシン	I- F:19	-	○	○	○	-	○	-	-	-	-	
11	シグナムWDG		普	1.ピラクロストロピン 2.ボスカリド	11、7	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	
12	ジマンダイセン水和剤		普	マンゼブ	M3	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	
13	スターナ水和剤		普	オキシロニック酸	31	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	
14	ストロビーフロアブル		普	クレソキシムメチル	11	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	
15	セイビアーフロアブル20		普	フルジオキシニル	12	○	○	-	-	○	-	-	-	-	-	
16	ダコニール1000		普	TPN	M5	-	-	○	○	○	○	○	-	○	-	
17	トップジンM水和剤		普	チオファネートメチル	1	-	-	-	-	○	-	-	-	-	○	
18	トップジンM粉剤DL		普	チオファネートメチル	1	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	
19	ナレート水和剤		普	1.オキシロニック酸 2.有機銅	31、M1	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	
20	パリダシン液剤5		普	パリダマイシン	U18	-	○	-	-	-	-	○	○	-	-	
21	パレード20フロアブル		普	ピラジフルミド	7	○	○	○	○	○	○	-	-	-	-	
22	ファンタジスタ顆粒水和剤		普	ピリベンカルブ	11	-	-	○	○	○	○	-	-	-	-	
23	フォリオゴールド		普	1. TPN 2.メタラキシル及びメタラキシルM	M5、4	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-	
24	フルピカフロアブル		普	メパニピリム	9	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-	

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(葉物)－ねぎ－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機分類	病虫害雑草名										
						黒腐菌核病	白絹病	さび病	黒斑病	小菌核腐敗病	葉枯病	べと病	軟腐病	苗立枯病(リゾクトニア菌)	萎凋病	ネギアザミウマ
25	プロポーズ顆粒水和剤		普	1. TPN 2. ベンチアバリカルブイソプロピル	M5、40	-	-	-	-	-	○	○	-	-	-	-
26	フロンサイド粉剤		普	フルアジナム	29	-	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-
27	ベルコート水和剤		普	イミノクタジン	M7	-	-	○	○	-	○	-	-	-	-	-
28	ペンコゼブ水和剤		普	マンゼブ	M3	-	-	○	○	-	-	○	-	-	-	-
29	ベンレート水和剤		普	ベノミル	1	-	-	-	-	○	-	-	-	-	○	-
30	ポリオキシシAL水和剤		普	ポリオキシシ	19	-	-	-	○	-	-	-	-	-	-	○
31	ポリベリン水和剤		普	1. イミノクタジン 2. ポリオキシシ	M7、19	-	-	-	○	○	○	-	-	-	-	○
32	モンカットフロアブル40		普	フルトラニル	7	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
33	モンガリット粒剤		普	シメコナゾール	3	○	○	-	-	○	-	-	-	-	-	-
34	ヨネポン水和剤		普	ノニルフェノールスルホン酸銅	M1	-	-	○	○	-	-	○	○	-	-	-
35	ランマンフロアブル		普	シアゾファミド	21	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
36	リゾレックス粉剤		普	トルクロホスメチル	14	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
37	リドミルゴールドMZ		普	1. マンゼブ 2. メタラキシル及びメタラキシルM	M3、4	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
38	レーバスフロアブル		普	マンジプロパミド	40	-	-	-	-	-	-	○	-	-	-	-
39	ロブラール水和剤		普	イプロジオン	2	-	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-





## 13-(51) ねぎ（野菜類、鱗茎類、鱗茎類(葉物)に登録のある農薬も使用可能)

病害虫名	防除方法	参考事項
さび病	<p>播種前、植付前 被害葉及び発病株をほ場に放置すると、翌年の伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず適正に処分する。</p> <p>生育期 肥切れしないようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春から秋にかけて発生し、夏には一時終息する。比較的低温で降雨が多いと多発する傾向があり、特に秋に多発して冬が温暖多雨の場合、翌春に多発することがある。</li> <li>多発すると防除効果が劣るため、早期発見に努める。</li> <li>アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブルは、薬害を生じる場合があるので、展着剤混用にあたっては事前にその適否を確認する。また、耐性菌の発生を避けるため過度の連用はしない。</li> <li>ネギは濡れにくく薬液が付着しにくいいため、展着剤を混用し、散布薬液の表面張力を下げ薬液の付着をよくし防除効果を高める。</li> </ul>
黒腐菌核病	<p>植え付け前からの体系防除を徹底する。</p> <p>播種前、植付前 1. 発病地の連作は避ける。 2. 罹病苗を本ぼに持ち込まない。 3. 適用薬剤による苗灌注処理を行う。 4. 苗床、本ぼを土壤消毒する。 (土壤くん蒸剤の項参照)</p> <p>生育期 1. 発病株および収穫後の残さは伝染源になるので、ほ場周辺に放置せず適正に処分する 2. 適用薬剤を散布または灌注処理する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>土壤中の温度が7.5℃～20℃で感染、発病する。</li> <li>平坦地の秋冬作では11月には発病が確認でき、厳冬期には一時的に病徴の進展は止まるが、3月になると再び進展する。</li> <li>パレード20フロアブルの苗灌注処理はセル成形苗およびペーパーポット苗のみの登録となっているので注意する。</li> <li>生育期防除の場合、第1回土寄せ時(9月下旬)の薬剤防除が特に重要である。</li> </ul>
小菌核腐敗病	<p>播種前、植付前 1. 発病株および収穫後の残さは伝染源になるので、ほ場周辺に放置せず適正に処分する。 2. 苗床、本ぼを土壤消毒する。 (土壤くん蒸剤の項参照)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>露地の秋冬作では夏～秋が冷涼・多雨であれば本病が多発しやすい。</li> <li>ほ場の排水不良で、ネギが湿害を受けると発病が多い。</li> </ul>
萎凋病	<p>播種前、育苗期、植付前 1. 苗床、本ぼを土壤消毒する。 (土壤くん蒸剤の項参照) 2. 石灰資材を用い土壤pHを6.5以上に矯正する。 3. 育苗中の乾燥や高温を避ける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連作ほ場で夏の高温時に多発する。</li> <li>育苗期間中から移植後15～60日間に多発する。</li> <li>苗床での発病は立枯れ症状で、下葉がわん曲、黄化する。症状の激しいものは萎凋し枯死する。</li> </ul>
白絹病	<p>植付前 1. 発病地の連作は避ける。 2. 前作の発病ほ場では土壤消毒を行う。 (土壤くん蒸剤の項参照)</p> <p>生育期 発病株は直ちに抜き取り処分する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>比較的高温(30℃)、多湿条件で発病しやすい。</li> <li>未熟有機物の施用で発生が多くなる。</li> <li>6月中旬頃から発生が始まり、梅雨末期から8月下旬に最も進行する。10月末頃にはほぼ終息する。</li> </ul>
葉枯病 (黄色斑紋症状)	<p>播種前、植付前 1. 被害葉及び発病株をほ場に放置すると、翌年の伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず適正に処分する。 2. 土壤pHを適正域(6.0～7.0)に保つ。 3. 適正な施肥管理を行い、窒素過多を避ける。</p> <p>生育期 早期発見に努め、発生初期から適用薬剤を散布する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原菌の生育適温は25℃前後だが、15～20℃のやや低温と適度な降雨は発病を助長する。10～11月及び3月に降雨が多いと多発しやすい。</li> <li>楕円形で蒼白色の斑紋や葉先枯れを生じ、その後病斑上に形成された分生胞子が中心葉に感染し、黄色斑紋症状の原因となる。</li> </ul>

各論作成日:2023年11月10日 必ずラベルを確認してから農業を使用してください。

病害虫名	防除方法	参考事項
萎縮病	<p>苗床 寒冷紗被覆育苗を行う。</p> <p>生育期 発病株は早期に抜き取り処分する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>萎縮病を媒介するアブラムシの飛来防止には、苗床期に銀色又は白色テープ（幅 5cm）を高さ 30cm、間隔 30cm に張ると効果が高い。</li> <li>幼苗期感染の実害が大きい。</li> <li>感染時期は、春播きでは有翅アブラムシが多く飛来する 4～6 月、秋播きでは 4～6 月と 9～11 月である。</li> <li>4～6 月と 9～11 月に、高温乾燥の天候が続くと、有翅アブラムシの発生が多くなるため保毒虫が多くなり、そのために多発する。特に暖冬で春先から初夏にかけて雨量の少ない年には発生が多い。</li> </ul>
黒斑病	<p>播種前、植付前 発病地の連作は避ける。</p> <p>生育期 生育後期に肥切れしないようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>残さ上の病原菌から空気・種子伝染する。</li> <li>5～11 月の高温多雨で多発しやすい。胞子は 24～27℃で発芽する。</li> <li>薬剤散布に湿展性の高い展着剤を加用する。</li> </ul>
軟腐病	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>発病地では連作を避け、ソルゴーなどのイネ科植物を栽培して土壌中の菌密度を下げる。</li> <li>低湿地やくぼ地では栽培を避けるか、排水をしっかりと行えるよう対策をとる。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>発病株は早期に抜き取り処分する。</li> <li>発病が予想される場合には、土寄せ前に地際部を中心に適用薬剤を散布する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原菌の最適発育温度は 28～34℃、初夏から初秋にかけ、特に盛夏に土壌湿度が高いと発病しやすい。</li> <li>長雨、台風等による集中豪雨、平年より気温が高い初秋の長雨などで、特に数日間畑が湛水や浸水すると激発する。また強風や土寄せ時に生じる傷からも感染し発病する。</li> <li>窒素肥料を多用すると生育が軟弱になり発病を助長するため、適正な施肥を行う。</li> </ul>
紅色根腐病	(タマネギの紅色根腐病の項参照)	<ul style="list-style-type: none"> <li>病原菌が根の残渣の中に残るため、連作により被害が拡大する。</li> </ul>
アザミウマ類	<p>育苗期、生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほ場周辺の除草をする。</li> <li>育苗期に防虫ネット（1mm 目合い以下）により進入を防ぐ。（防虫ネットによる防除の項参照）</li> <li>中耕・土寄せの際に株間の除草をする。</li> </ol> <p>ウイルス病（IYSV）</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほ場周辺の雑草防除を行う。</li> <li>ネギアザミウマ成虫が媒介するので、ネギアザミウマの防除を行う。（野菜・花きのウイルス病防除対策の項参照）</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春および秋の乾燥条件で発生が多くなる。特に、空梅雨の年は多発しやすいので注意を要する。</li> <li>成幼虫の体長は 1～2mm で小さく、初発生を肉眼で確認することは困難である。わずかな葉のカスリ状の食害痕を見つけて防除につとめる。</li> <li><i>Iris yellow spot virus</i> (IYSV)によるウイルス病（症状）</li> <li>葉身にはっきりした白色のえそ症状となり、さらに症状が進むと 15 mm 程度の不鮮明なえそ条斑を示す。</li> </ul>
ネギハモグリバエ	<p>植付時、生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>定植時に適用薬剤を施用する。</li> <li>発生初期に適用薬剤を散布する。</li> <li>被害残さは適正に処分する。（ハモグリバエ類の防除対策の項参照）</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>多発してからの防除は困難である。特に幼苗期に多発すると枯死株を生じ被害が大きくなる</li> <li>苗では葉鞘部に幼虫が寄生すると、その部分から枯れだすことが多い。ネギの生育状況に注意をはらい、葉に現われる白い小斑点、白い筋の早期発見につとめる。</li> <li>薬剤散布に浸透移行性を高める機能性展着剤を加用する。</li> </ul>

各論作成日:2023年11月10日 必ずラベルを確認してから農薬を使用してください。

病害虫名	防除方法	参考事項
クロバネキノコバエ類	<p>植え付け前からの体系防除を徹底する。</p> <p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 明渠の設置など水はけの改善に努める。</li> <li>2. 堆肥は完熟堆肥を使用し、多量施用を避ける。</li> </ol> <p>生育期</p> <p>適用薬剤を散布する。</p> <p>収穫後</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 被害残渣は分散防止に努めながらほ場外で適切に処分する。</li> <li>2. ほ場内では石灰窒素(60kg/10a)を施用して残渣をすき込む。</li> <li>3. 可能であれば土壤消毒を実施する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水はけの悪い、あるいは有機物の投入が多いと多発しやすい。</li> <li>・クロバネキノコバエ科の一種であるネギネクロバネキノコバエは、国内既発生種(チバクロバネキノコバエなど)に比べて、より低温で活動することができ、土寄せ後の秋冬期に増加する傾向がある。そのため、冬の収穫期になって本種の被害に気がつくことが多い。本種の発生ほ場では、可能な限りネギ及びニンジン以外の作物を栽培することが望ましい。</li> <li>・秋冬期の第1回土寄せ時における薬剤防除が特に重要である。</li> </ul>
ネギコガ	<p>植付時、生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 定植時に適用薬剤を施用する。</li> <li>2. 発生初期に適用薬剤を散布する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発生量は5~7月、9~11月に多い。</li> </ul>
タネバエ	<p>播種前、植付前</p> <p>作物残さ、被害株をほ場内に残さないように処分する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・苗の時に被害がしやすい。</li> <li>・未熟有機物を施用すると、多発しやすい。</li> </ul>
ネダニ類	<p>植付前~収穫期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 苗による持ち込みを防止する。</li> <li>2. 土壌中の残存虫を防除する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・成虫は地下部に寄生し、根の生育を抑制させ、地上部は生育不良となる。</li> <li>・莖皮をはがすと、白色で小さく卵形のネダニが多数寄生している。</li> <li>・4月頃から活動を開始し、初夏および初秋に多く増殖する。</li> </ul>

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(根物)－たまねぎ－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名											
						灰色かび病	灰色腐敗病	べと病	白色疫病	苗立枯病	さび病	黒斑病	軟腐病	腐敗病	乾腐病	黒腐菌核病	
1	アフエットフロアブル		普	ペンチオピラド	7	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
2	アミスター20フロアブル		普	アゾキシストロビン	11	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
3	オーソサイド水和剤80		普	キャプタン	M4	○	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-
4	オロンディスウルトラSC		普	1.オキサチアピフロリン 2.マンジプロパミド	49,40	-	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
5	オンリーワンフロアブル		普	テブコナゾール	3	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
6	カンタスドライフロアブル		普	ボスカリド	7	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
7	ゲッター水和剤		普	1.ジエトフェンカルブ 2.チオファネートメチル	10、1	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
8	シグナムWDG		普	1.ピラクロストロビン 2.ボスカリド	11、7	○	○	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
9	ジマンダイセン水和剤		普	マンゼブ	M3	○	○	○	○	-	○	○	-	-	-	-	-
10	スミレックス水和剤		普	プロシミドン	2	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
11	セイビアーフロアブル20		普	フルジオキシニル	12	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
12	ダコニール1000		普	TPN	M5	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
13	ドーシャスフロアブル		普	1. TPN 2. シアゾファミド	M5、21	○	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	トップジンM水和剤		普	チオファネートメチル	1	-	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
15	バリダシン液剤5		普	バリダマイシン	U18	-	-	-	-	-	-	-	○	○	-	-	-
16	ファンタジスタ顆粒水和剤		普	ピリベンカルブ	11	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
17	フォリオゴールド		普	1. TPN 2. メタラキシル 及びメタラキシルM	M5、4	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
18	プロポーズ顆粒水和剤		普	1. TPN 2. ベンチアパリ カルブイソプロピル	M5、40	○	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
19	フロンサイド粉剤		普	フルアジナム		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	○
20	ベンコゼブ水和剤		普	マンゼブ	M3	○	-	○	-	-	-	○	-	-	-	-	-
21	ベンレート水和剤		普	ベノミル	1	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-
22	ランマンフロアブル		普	シアゾファミド	21	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
23	リドミルゴールドMZ		普	1. マンゼブ 2. メタラキシル 及びメタラキシルM	M3、4	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
24	レーバスフロアブル		普	マンジプロパミド	40	-	-	○	○	-	-	-	-	-	-	-	-
25	ロブラール水和剤		普	イプロジオン	2	○	○	-	-	-	-	○	-	-	-	-	-

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(根物)－たまねぎ－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名							
						アザミウマ類	ハスモンヨトウ	アブラムシ類	ネギアザミウマ	ネキリムシ類	ネギハモグリバエ	タネバエ	ハモグリバエ類
1	アグロスリン水和剤	抑制	劇	シペルメトリン	3A	○	-	-	-	-	-	-	-
2	アディオン乳剤	抑制	普	ペルメトリン	3A	○	○	-	-	-	-	-	-
3	アドマイヤー顆粒水和剤		劇	イミダクロプリド	4A	○	-	-	-	-	-	-	-
4	エルサン乳剤		劇	PAP	1B	○	-	○	-	-	-	-	-
5	オルトラン水和剤		普	アセフェート	1B	-	-	-	○	-	○	-	-
6	ガードバイトA	抑制	普	ペルメトリン	3A	-	-	-	-	○	-	-	-
7	カスケード乳剤	抑制	普	フルフェノクスロン	15	-	-	-	○	-	○	-	-
8	グレーシア乳剤	抑制	普	フルキサメタミド	30	-	-	-	○	-	○	-	-
9	コルト顆粒水和剤		普	ピリフルキナゾン	9B	-	-	-	○	-	○	-	-
10	ジェイエース水溶剤		普	アセフェート	1B	-	-	-	○	-	-	-	-
11	スミチオン乳剤		普	MEP	1B	○	-	○	-	-	-	-	-
12	ダイアジノン乳剤40		劇	ダイアジノン	1B	○	-	○	-	-	○	-	-
13	ダイアジノン粒剤5		普	ダイアジノン	1B	-	-	-	-	-	-	○	-
14	ディアナSC		普	スピネトラム	5	○	○	-	-	-	○	-	-
15	ファインセーブフロアブル	抑制	劇	フロメキン	34	○	-	-	-	-	-	-	-
16	マラソン乳剤		普	マラソン	1B	○	-	○	-	-	-	-	○
17	モスピラン顆粒水溶剤	抑制	劇	アセタミプリド	4A	○	-	-	-	-	-	-	-
18	リーフガード顆粒水和剤	抑制	劇	チオシクラム	14	-	-	-	○	-	○	-	-

## 13-(52) たまねぎ（野菜類、鱗茎類、鱗茎類(根物)に登録のある農薬も使用可能)

病害虫名	防除方法	参考事項
べと病	<p>植付前</p> <p>定植時には厳選した健全苗を用い、病苗を本ぼへ植え付けられないよう十分な注意を要する。</p> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 排水を良好にする。</li> <li>2. 越冬罹病株は早期に除去する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発病適温は15℃前後で、降雨や曇天の多い時期に発病しやすい。</li> <li>・病原菌は土中で被害残渣とともに卵孢子という休眠形態で約10年間生存する。</li> </ul>
灰色腐敗病	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 多肥栽培を避け、追肥は3月上旬までに終える。</li> <li>2. 元肥の堆厩肥は多用を避ける。</li> <li>3. 球肥大～倒伏期に、葉鞘基部を重点に薬剤防除する。</li> </ol> <p>貯蔵中</p> <p>くずたまねぎや腐敗球などの処分は早期に完全に行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発育適温は25℃で、貯蔵含め全期間で感染する。</li> <li>・1～3月の多雨の影響が大きい。</li> <li>・収穫直前の浸冠水や雨中での収穫により、貯蔵中の発生が多くなる。</li> </ul>
紅色根腐病	<p>播種前、植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発病ほ場では連作を避ける。</li> <li>2. 薬剤による土壌消毒を行う。</li> <li>3. 定植時には発病苗を植え付けられないよう注意を要する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病原菌が根の残渣に残るため、連作により被害が拡大する。</li> </ul>
黒かび病	<p>収穫時</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 傷を付けないように丁寧に収穫する。</li> <li>2. 土をなるべくきれいに落としてから収穫する。</li> </ol> <p>貯蔵時</p> <p>貯蔵庫内の温度が上がりすぎないように注意する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・貯蔵中、高温条件下(30～40℃)で発病しやすい。</li> <li>・病原菌は <i>Aspergillus niger</i> (好高温性菌)</li> </ul>
黒腐菌核病	<p>播種前、植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発病地では、連作は避ける。</li> <li>2. 被害残渣を放置しない。</li> <li>3. 定植時には発病苗を植え付けられないよう注意を要する。</li> <li>4. 苗床、本ぼを土壌消毒する。(土壌くん蒸剤の項参照)</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気温15～20℃の時に蔓延が著しく、25℃以上になると発病は停止する。</li> <li>・3～5月頃に発病することが多いが、多発ほ場では12月頃から症状が認められる場合もある。</li> <li>・ネギ属植物に共通する病害である。</li> </ul>
アブラムシ類	<p>播種前(苗床)～植付時</p> <p>寒冷紗被覆育苗を行う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・萎縮病を媒介するアブラムシ類の飛来防止には苗床期に銀色又は白色テープ(幅5cm)を高さ30cm、間隔30cmに張ると効果が高い。</li> <li>・幼苗期感染の実害が大きい。</li> </ul>
タネバエ	<p>育苗～植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 作物残さ、被害タマネギをほ場内に残さないようにする。</li> <li>2. 育苗中に寄生した苗を本ぼに持ち込まないように注意する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・苗の時に被害がしやすい。</li> <li>・未熟有機物を施用すると、多発しやすい。</li> </ul>

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(葉物)－にら－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県 指定	製剤 毒性	有効成分の種類	作用機構 分類	病害虫雑草名					
						株 腐 細 菌 病	白 斑 葉 枯 病	さ び 病	白 絹 病	乾 腐 病	葉 腐 病
1	Zボルドー		普	銅	M1	○	○	-	-	-	-
2	アフェットフロアブル		普	ペンチオピラド	7	-	○	○	○	-	-
3	アミスター20フロアブル		普	アゾキシストロビン	11	-	○	-	-	-	-
4	オンリーワンフロアブル		普	テブコナゾール	3	-	-	○	-	-	-
5	ストロビーフロアブル		普	クレソキシムメチル	11	-	○	○	-	-	-
6	セイビアーフロアブル20		普	フルジオキシニル	12	-	○	-	-	-	-
7	トップジンM水和剤		普	チオファネートメチル	1	-	○	-	-	○	-
8	トリフミン水和剤		普	トリフルミゾール	3	-	-	○	-	-	-
9	バリダシン液剤5		普	バリダマイシン	U18	-	-	-	○	-	○
10	ファンタジスタ顆粒水和剤		普	ピリベンカルブ	11	-	○	-	-	-	-
11	フロンサイド粉剤		普	フルアジナム	29	-	-	-	○	-	-
12	ポリオキシシンAL水溶剤		普	ポリオキシシン	19	-	○	-	-	-	-
13	モンガリット粒剤		普	シメコナゾール	3	-	-	-	○	-	-

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(根物)－なら－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名					
						ネギアザミウマ	アザミウマ類	ネキリムシ類	アブラムシ類	ネダニ類	クロバネキノコバエ類
1	アクタラ顆粒水溶剤	抑制	普	チアトキサム	4A	○	-	-	-	-	-
2	アグロスリン乳剤	抑制	劇	シペルメトリン	3A	○	-	-	-	-	○
3	アドマイヤー1粒剤		普	イミダクロプリド	4A	-	○	-	-	-	-
4	アルバリン顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	○	-	-	○	-	○
5	カスケード乳剤	抑制	普	フルフェノクスロン	15	-	○	-	-	-	-
6	コルト顆粒水和剤		普	ピリフルキナゾン	9B	○	-	-	-	-	-
7	スタークル顆粒水溶剤	抑制	普	ジノテフラン	4A	○	-	-	○	-	○
8	スピノエース顆粒水和剤	抑制	普	スピノサド	5	-	○	-	-	-	-
9	ダイアジノン粒剤5		普	ダイアジノン	1B	-	-	○	-	-	-
10	ダントツ水溶剤	抑制	普	クロチアニジン	4A	○	-	-	○	-	-
11	ディアナSC		普	スピネトラム	5	-	○	-	-	-	-
12	トクチオン細粒剤F		普	プロチオホス	1B	-	-	-	-	○	-
13	トクチオン乳剤		普	プロチオホス	1B	-	-	-	-	○	-
14	ネコナカットフロアブル	抑制	普	エトキサゾール	10B	-	-	-	-	○	-
15	ネマキック粒剤		普	イミシアホス	1B	-	-	-	-	○	-
16	ハチハチ乳剤	抑制	劇	トルフェンピラド	I:21A F:39	○	-	-	-	-	-
17	ファインセーブフロアブル	抑制	劇	フロトキン	34	-	○	-	-	-	-
18	フォース粒剤	抑制	劇	テフルトリン	3A	-	-	○	-	○	-
19	プレオフロアブル		普	ピリダリル	UN	○	-	-	-	-	-
20	モスピラン顆粒水溶剤	抑制	劇	アセタミプリド	4A	-	○	-	○	-	-
21	リーフガード顆粒水和剤	抑制	劇	チオシクラム	14	○	-	-	-	-	-

13-(53) にら (野菜類、鱗茎類、鱗茎類(葉物)に登録のある農薬も使用可能)

病害虫名	防除方法	参考事項
白絹病	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 酸性土壌で発病しやすいため、土壌 pH を矯正する。</li> <li>2. 土壌消毒を行う。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 過乾、過湿は発病を助長するため適湿で栽培する。</li> <li>2. 発病株はまわりの土とともに除去し、適正に処理する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・7~9月に発病し、30℃以上の高温で経過する年に発病しやすい。</li> <li>・地下部の根や鱗茎に異常はない。</li> <li>・多窒素過剰で発病しやすい。</li> <li>・被害残渣やその周辺に作られた菌核は土中で約6年間生存し、一次伝染源となる。</li> </ul>
白斑葉枯病	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 密植を避け、発病葉は刈り取り、ほ場周辺に放置しないで適切に処分する。</li> <li>2. 施設栽培ではかん水や換気に注意し多湿にしない。</li> <li>3. 排水不良畑では排水を良好にする。</li> </ol> <p>収穫期</p> <p>施設栽培では、紫外線除去フィルムを展張して発病を抑制する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病原菌はボトリチス菌である。</li> <li>・発病しやすい時期は、露地栽培では4~6月、施設栽培では11~4月の比較的低温多湿の時期である。</li> <li>・枯死葉の上に黒色の小さな菌核を形成する。菌核の有無により病徴の似ているえそ条斑病と判別できる。</li> </ul>
葉腐病	<p>植付前</p> <p>発病ほ場では、連作を避ける。</p> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発病株は根ごと取り除き処分する。</li> <li>2. 排水不良畑では排水を良好にする。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8~9月の高温期に発生が多い。</li> <li>・強い降雨や台風の後などに発病が多くなる傾向がある。</li> </ul>
萎縮病	<p>播種前(苗床)~植付時</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 寒冷紗被覆育苗を行う。</li> <li>2. アブラムシ類が媒介するので、防除を行う。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 収穫時には刃物を数丁用意し、汁液による伝染を最小限にとどめる。</li> <li>2. 発病株は早期に抜き取り処分する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アブラムシ類が媒介する。</li> <li>・また、刈り取り時に刃物を介して汁液伝染する。</li> <li>・苗床と秋季の感染が多い。</li> <li>・発病株は早期に抜き取り処分する。</li> </ul>
えそ条斑病	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. ほ場周辺の雑草防除を行う。</li> <li>2. ネギアザミウマが媒介するので、防除を行う。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・IYSV(アイリス黄斑ウイルス)によるウイルス病(症状)</li> <li>・葉身に斑点状に淡褐色の条斑が生じる。さらに病徴が進むと不鮮明なえそ条斑を示す。</li> <li>・症状は白斑葉枯病と類似している。</li> <li>・捨て刈り後はほとんど病斑が見られなくなる。</li> </ul>
乾腐病	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 連作畑では苗床での感染が多いため、苗床は土壌消毒する。</li> <li>2. 酸性土壌で発病しやすいため、本ぼの pH を矯正する。</li> </ol> <p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 過乾、過湿は発病を助長するため適湿で栽培する。</li> <li>2. 刈り取り回数が多くなると病徴が進行するため、発病ほ場では刈り取り回数が多くなるように注意する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・株の一部茎葉の葉幅が狭く紫紅色になり、その後萎凋して枯死する。</li> <li>・茎盤や維管束の褐変が観察される。</li> <li>・りん茎の腐敗は軟腐状ではなく乾腐状に腐敗する。</li> </ul>

各論作成日:2023年11月10日 必ずラベルを確認してから農薬を使用して下さい。

病害虫名	防除方法	参考事項
さび病	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>排水を良好にし、密植をさけ、通風をよくする。</li> <li>肥料切れや窒素過多は発病を助長するので、基肥は土壌診断に基づき施用する。また、秋の肥料切れに注意する。</li> <li>7～8月の高温期は生育が緩慢になり肥料の吸収量が低下するため、基肥は控えめにし、9月中旬以降に追肥する。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>8月中旬以降、気温が低下してくると徐々に発生が見られるようになる。冷夏の年は8月上旬から発生が見られる。</li> <li>地下部の根や鱗茎に異常はない。</li> <li>罹病葉は捨て刈り後に畑の外に持ち出して処分する。</li> </ul>
ネダニ類	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>苗による持ち込みを防止する。</li> <li>土壌中の残存虫を防除する。</li> </ol> <p>生育期～収穫期</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>初期防除が重要で、生育不良株などが見られたら、速やかに防除する。</li> </ul> <p>栽培終了後</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>作物残渣を持ち出すか、適用薬剤で枯死させるなどしてほ場内に作物残渣を残さないようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>下葉の枯れ込み、葉数や葉幅の減少、葉の伸長が鈍くなる。</li> <li>茎皮をはがすと、白色で小さく卵形のネダニが多数寄生している。</li> <li>苗での持ち込みや前作残さが発生源となる。</li> <li>株の生育が良いと被害に気づきにくい。</li> <li>地温10℃前後から活動する。30℃前後の高温及び多湿条件で繁殖が旺盛となる。盛夏期は活動が弱まるが、春～初夏と秋に被害が増える。</li> <li>通常の生育ステージは卵、幼虫、第1若虫、第3若虫であるが、環境条件が悪化すると、耐久性の高い第2若虫（ヒボプス）となり長期間生存する。寄主作物があると第3若虫に戻り、成虫となって増殖する。</li> <li>砂土や火山灰土、有機質に富む土壌を好み、連作ほ場で多発する。露地では一年中発生する。</li> </ul>
ネギネクロバネキノコバエ	<p>植付前</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>明渠の設置など水はけの改善に努める。</li> <li>堆肥は完熟堆肥を使用し、多量施用を避ける。</li> <li>土壌消毒を行う。</li> </ol> <p>生育期および収穫期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>発生ほ場では、農薬による防除を行う。</li> <li>捨て刈りした地上部や調製作業で発生した残渣は、ほ場外で適切に処分する。</li> </ol> <p>収穫後</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>被害残渣は、ほ場外で適切に処分する。</li> <li>ほ場内では石灰窒素を施用して残渣をすき込む。</li> </ol> <p>その他</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>発生ほ場で使用した機械を未発生ほ場に持ち込む際には、機械の洗浄を行う。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>成虫は体長2mm程度のハエであり、ウジ状の幼虫が地下部を食害する。</li> <li>寄生が進むと、株は生育不良となり、激しく加害されると株の茎葉がしおれる。</li> <li>水はけの悪いほ場、あるいは収穫残渣などをすき込んだほ場などで多発しやすい。</li> <li>本害虫は高温に弱いため、ニラ収穫後の6月～7月に、農ポリでの被覆やハウスを3日間、密閉することにより、地温を上昇させ、土中の密度を低下させる方法もある。なお、頭上灌水設備があるハウスでは、密閉によりハウス内の気温が高くなり、灌水チューブ等が変形する恐れがあるため、ニラ株の被覆のみで処理を行う。</li> <li>本種の発生ほ場では、可能な限り、被害が確認されているネギ、ニラ及びニンジン以外の作物を栽培することが望ましい。</li> </ul>
ネギアブラムシ	<p>生育期</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ほ場周辺の雑草防除を行う。</li> <li>発生初期に薬剤防除を行う</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>主に春に発生し、萎縮病（ウイルス）等を媒介する。</li> </ul>

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(根物)－にんにく－殺菌剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名				
						春腐病	さび病	葉枯病	黄斑病	黒腐菌核病
1	ICボルドー66D		普	銅	M1	○	-	-	-	-
2	Zボルドー		普	銅	M1	○	○	-	-	-
3	アグリマイシン-100		普	1.オキシテトラサイクリン 2.ストレプトマイシン	41、25	○	-	-	-	-
4	アミスター20フロアブル		普	アゾキシストロビン	11	-	○	○	-	-
5	オンリーワンフロアブル		普	テブコナゾール	3	-	○	○	○	-
6	ジマンダイセン水和剤		普	マンゼブ	M3	-	-	○	-	-
7	ダコニール1000		普	TPN	M5	-	○	○	○	-
8	ファンタジスタ顆粒水和剤		普	ピリベンカルブ	11	-	○	○	○	-
9	ベンレートT水和剤20		普	1.チウラム 2.ベノミル	M3、1	-	-	-	-	○
10	ポリベリン水和剤		普	1.イミノクタジン 2.ポリオキシシン	M7、19	-	-	○	○	-
11	モンガリット粒剤		普	シメコナゾール	3	-	-	-	-	○

## 野菜類－鱗茎類－鱗茎類(根物)－にんにく－殺虫剤

※農薬の使用に際しては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認してください。  
更新年月日:2023/11/10

	農薬の名称	群馬県指定	製剤毒性	有効成分の種類	作用機構分類	病害虫雑草名			
						アブラムシ類	ネギコガ	イモグサレセンチュウ	アザミウマ類
1	オルトラン水和剤		普	アセフェート	1B	○	○	-	○
2	ダイアジノン水和剤34		劇	ダイアジノン	1B	-	○	-	-
3	ファインセーブフロアブル	抑制	劇	フロメキン	34	-	-	-	○
4	ベネビアOD	抑制	普	シアントラニリプロール	28	○	○	-	○
5	ラグビーMC粒剤		普	カズサホス	1B	-	-	○	-